

酒田方言における進行相と結果相の対立

——とくに結果相の用法について——

荒井 孝一

要 旨

庄内方言の一つである酒田方言には、シテル形式(進行相)とサテル形式(結果相)の継続相がある。これは標準語の「している」と「してある」の対立ににているようにみえるが、標準語の「している」が動作主体の、1)進行の状態と、2)結果の状態とをあらわすのに対して、この方言では、動作対象の結果の状態だけでなく、動作主体の結果の状態をもサテル形式があらわし、進行と結果の対立が語形の対立としてあらわれている。

その基本的な用法では、「シテル」と「サテル」は、自動詞のばあい、西日本各方言の「シオル」と「シトル」の対立とよくにているが、サテル形式は、この基本的な用法のみならず、おおくの派生的な用法を発達させていて、さまざまなモーダルなニュアンス——完了性、習慣性、感情評価やボイス的なものなど——もあらわす。

I. 概 観

一. はじめに

この研究は、山形県酒田方言にみられる二つのアスペクト形式の対立についての報告である。

この地方には、標準語の「している(かいている)」と「してある(かいてある)」の二つのアスペクト形式に相当する「シテル(カイデル)」と「サテル(カガテル)」の二つのアスペクト形式があるが、二形式の対立のありかたが「している」と「してある」の対立のありかたとはことなるので、それをめぐって報告するものである。

筆者は以前、第38回日本方言研究会において、「酒田方言の動詞のアスペクト」と題して報告したが、そのときには、標準語の「している」に対応する部分だけにしか注目しなかったので、当方言には、標準語「している」の二つの基本的意味に対応する「シテル」と「サテル」の二つの形式があることだけを報告した。なお、そのときは、これを西日本方言の「シオル」と「シトル」の対立に相当するものとのべた。

表1 (p.1)

標準語の形式	～している		～してある
アスペクトの意味	動作主体の 進行の状態	動作主体の 結果の状態	動作対象の 結果の状態
当方言の形式	～シテル	～サテル	

(16) 酒田方言における進行相と結果相の対立

しかし、その後さらに用例を採集して検討をくわえたところ、この「サテル」が標準語の「してある」の領域にまでひろがっていて、基本的にはつぎのようにとらえるほうが適当であることがわかった。(表1)

これを例文でしめすとつぎようになる。

- ・イヌ ハシテル (いぬがはしっている)。
- ・デンキ ツガテル (電気がついている)。
- ・ツグエノ ウエサ ホン オガテル (机の上に本がおいてある)。

「シテル」と「サテル」のこのような対立のありかたをみると、この二形式をそれぞれ「進行相」「結果相」と名づけることは、標準語の「している」「してある」をそう名づけることよりも、いっそうふさわしいとおもわれる。

これは、いちばん基本的な用法についてのべたのだが、この形式は、標準語の「してある」「している」と同様、その結果性が完了性とむすびについて派生的な用法をもっている。ここでは、そのうちの二例をしめす。

準備のできた状態をあらわす。

- ・ホノ ゴドダバ モー シャベラテル (そのことはもう話してある)。

すでにおわったことをあらわす。

- ・オヤジダバ オレ ツグ メ シナテダ (父は私がつくまえに死んでいた)。

以上は、標準語と対応する部分についてのべたのだが、当方言のこの二形式の対立は、さらに大きなひろがりを見せ、モーダルなニュアンスのちがいで、あらわしわける役わりをひきうけている。

たとえば、つぎの二例は、「シテル」でも「サテル」でもいえるのであるが、「サテル」でいうと、前者では〈最後までがんばっている〉というニュアンスが、後者では〈つよい感情をあらわしている〉というニュアンスがつくことになる。

- ・バス スッカリ トマルマデ コシカグラテレバ ケガ ネデンダ (バスがすっかり止まるまで腰かけていれば怪我がないわけだ)。

- ・ムスゴ オンナサ ダマテ アイ イタナドゴ オヤジ ゴゲラテル (息子が女に、黙って会いに行ったのをおやじが怒っている)。

さらに、標準語「してしまった」があらわす期待外のできごとの成立も、「サテダ」(サテルの過去形)であらわせる。

- ・オモワズ ワラワテダ (おもわずふきだしてしまった)。

この報告では、こうした点もふくめて記述する。なお、全体を通して、結果相のほうに焦点をあてたので、最初をのぞいて、結果相の意味用法を記述していくことになる。

二. 語形のつくりかた

進行相「～シテル」は、中止形(～シテの形)に「-ru」をつけた形である。結果相「～サテル」は、終止形(～スル)から-uをとって、「-ateru」をつけた形である。ただし、結果相において、カ変(kuru-korateru)とサ変(suru-sateru)は例外である。活用形ごとに単語

例をならべるとつぎのようになる。

なお、この報告は、文法記述なので、全体としては例文をカナ表記でしめすが、この項だけはローマ字による音韻表記をそえておく。

活用の種類

もとの形式	進行相の形式	結果相の形式
* 五段活用		
ハナス hanasu	ハナシテル hanasiteru	ハナサテル hanasateru
トブ tobu	トンデル toNderu	トバテル tobateru
ノム nomu	ノンデル noNderu	ノマテル nomateru
シヌ sinu	シンデル siNderu	シナテル sinateru
トル toru	トテル toteru	トラテル torateru
カウ kau	カテル kateru	カワテル kawateru
カズ(勝) kazu	カテル kateru	カグテル kadateru
カグ(書) kagu	カイデル kaideru	カガテル kagateru
イグ igu	イテル iteru	イガテル igateru
カグ(嗅) kaju	カイデル kaideru	カガテル kaqateru
* 一般活用		
オギル ogiru	オギデル ogideru	オギラテル ogirateru
ミル miru	ミデル mideru	ミラテル mirateru
ウゲル ugeru	ウゲデル ugederu	ウゲラテル ugerateru
ネル neru	ネデル nederu	ネラテル nerateru
* サ変		
スル suru	シテル siteru	サテル sateru
勉強-suru	勉強-siteru	勉強-sateru
* カ変		
クル kuru	キテル kiteru	コラテル korateru
* うけみ		
トラレル torareru	トラレデル torarederu	トラレラテル torarerateru
* 使役		
トラシエル torasjeru	トラシエデル torasjederu	トラシエラテル torasjer-ateru
* 「モノ可能」		
カガル kagaru	カガテル kagateru	カガラテル kagarateru

「モノ可能」については、この報告の最後でふれる。

進行相「シテル」、結果相「サテル」という形式は、どちらも文法的な派生動詞であって、それぞれ、ムード、テンスによってさらに語形をかえる。その終止形のパラダイムを、動詞「トル」を例に、簡単にしめしておく(表2)。表からもわかるように、庄内方言では、

(18) 酒田方言における進行相と結果相の対立

表2 (p.3)

テンス・ムード		アスペクト	進行相		結果相		
の べ た て 法	断 叙	現在未来形	トテル	toteru	トラテル	torateru	
		過去形	トテダ トッタ	toteda toqta	トラテダ トラッタ	torateda toraqta	
		報 告	現在未来形	トテルケ トテッケ	toteruke toteqke	トラテルケ トラテッケ	torateruke torateqke
			過去形	トテダケ トツタケ	totedake toqtake	トラテダケ トラツタケ	toratedake toraqtake
	推 量	直 叙	現在未来形	トテルンデロ トテンデロ	toteruNdero toteNdero	トラテルンデロ トラテンデロ	torateruNdero torateNdero
			過去形	トテダンデロ トツタンデロ	totedaNdero toqtaNdero	トラテダンデロ トラツタンデロ	toratedaNdero toraqtaNdero
		報 告	現在未来形	トテルケンデロ トテッケンデロ	totarukeNdero toteqkeNdero	トラテルケンデロ トラテッケンデロ	toraterukeNdero torateqkeNdero
			過去形	トテダケンデロ トツタケンデロ	totedakeNdero toqtakeNdero	トラテダケンデロ トラツタケンデロ	toratedakeNdero toraqtakeNdero
	はたらき かけ法	さそいかけ形	トテロ	totero	トラテロ	toratero	
		めいれい形	トテレ	totere	トラテレ	toratere	

促音便の促音にあたるものは、規則的に脱落する。

三. 分 布

現在、シテルとサテルの対立のある地域はつぎのとおりである。

- 1) 酒田市の中心街では都市化の影響をうけ、ほとんどわすれられているようである。だが、モーダルなニュアンスのほうでは、そのかぎりではないようだ。
- 2) 最上川北岸より北方、秋田県境の遊佐町吹浦ぐらいまでの飽海郡にはかなりみられる。
- 3) 亀ヶ崎・大宮・遊摺部 (以上酒田市)・余目町周辺諸部落 (最上川南岸) でたかい理解＝使用度をしめす。
- 4) 鶴岡市の文化圏・交通圏ではみられないようであるが、昔から水路など酒田への交通手段があったところは、一定の度数で存在する。
- 5) とくに、モーダルなひろがりについていえば、鶴岡市の文化圏に属している三川町などでも確実にみられ、かなりひろい範囲にわたっているようである。

しかし、いちばんよく残っている地域のひとつである亀ヶ崎においても、若年層ではほとんどサテル形式がみられなくなっている。シテル形式のほうにかわっているのである。

表3 (p.3)

年代	サテルの理解＝使用状況
80代以上	ほぼ100%ちかく
70代	90～90数%ぐらい
60代	80%ぐらい
50代	60%ぐらい
40代	40%ぐらい
30代	20%ぐらい
20代	10数%ぐらい
10代(高校生)	10%あまり

たり、また、他の研究者によるききがきや昔話集などをあつめたりしていたので、できるかぎりそのような資料からも用例を採集しようところみた。なお、この用例のなかには、筆者自身の内省によるものもふくまれている。

II. 酒田方言の結果相の意味用法

一. 基本的な用法

(一)動作主体の結果の状態

標準語の「している」には基本的に二つの用法がある。動作の持続(進行)と変化の結果の持続である。「坂道を人が走っている」は前者であり、「坂道に人が倒れている」は後者であるが、この二つのアスペクチュアルな意味のちがいをもたらすものは、基本的には動詞の語彙的な意味のちがいである。前者の動詞、「走る」は主体の動作をあらわし、後者の動詞「倒れる」は主体の変化をあらわしている。それぞれを動作動詞、変化動詞という。ふつう動作動詞のばあい、「している」は、主体の動作の進行の状態をあらわし、変化動詞のばあいは、主体の変化の結果の状態をあらわす。

しかし、当方言では、動作の進行の状態は進行相があらわし、結果相は、動作(うごきや変化をふくむひろい意味での動作)の結果の状態だけをあらわす。そしてこのばあいは、やはりおおくは変化動詞がつかわれる。変化動詞はふつうは自動詞である。

つぎの4組の例は、シテルとサテルのあらわす意味を比較対照できるように、ならべてあげたものである。奇数番号がシテルであって、動作の進行の状態をあらわし、偶数がサテルであり、変化の結果の状態をあらわしている。はじめの2組でいえば、「ツモル」という動作の主体は「雪」であり、「家」は「モエル」動作の主体である。また、例8の動詞「ノボル」は、このばあい位置変化をあらわす。

1) ケサ オギダ ミダバ ドンドド ユギ ツモテル (けき起きてみたらどどん雪が積もっているー降っているの意)。

表3は、1983年に筆者がしらべた、亀ヶ崎における、各年代の「サテル」の理解＝使用状況である。それからすでに、6年たっていて当時の老人の数も減った。それにつれてサテルの研究もすこしむずかしくなっている。しかし、派生的な、モーダルなニュアンスについては、そのかぎりではないようである。

四. 資料採集の方法

この報告の資料は主として筆者の企画にもとづくアンケート調査によるものである。筆者は以前から古老の話をききがきし

(20) 酒田方言における進行相と結果相の対立

- 2) ケサ オギデ ミダバ タゲグ ユギ ツモラテル (けき起きてみたら高く雪が積もっている)。
- 3) イマ エ モエデル (いま家が燃えている)。
- 4) モー エ モエラテル (もう家が燃えている—燃えおわっているの意)。
- 5) カダガッタ コップガラ スコシズツ ミズ マガテル (傾いたコップから少しずつ水がこぼれている)。
- 6) タオレダ コップガラ スッカリ ミズ マガラテル (倒れたコップからすっかり水がこぼれている)。
- 7) ハアハア イイナガラ ノボテル (ハアハアいいながら登っている)。
- 8) ハアハア イイナガラモ ヤット チョージョーサ ノボラテル (ハアハアいいながらもやっと頂上に登っている)。
- 「アイデル(開)」「アガテル」「サイデル(咲)」「サガテル」「フィデル(吹)」「フガテル」などは、一見音声的なヴァリエントのようにみえるが、同様の意味の違いをもつ。
- 9) ドロポーノ テデ イマ ソット ト アイデル (泥棒の手でいまそっと戸が開きつつある)。
- 10) イズノマニガ ト アガテル (いつのまにか戸が開いている)。
- 11) イマ ダンダン デッケグ サイデル (いまだんだん大きく咲きつつある)。
- 12) マンカイ チカグマデ サガテル (満開ちかくまで咲いている)。
- 13) ソヨソヨ カゼ フィデル (そよそよと風が吹いていふ)。
- 14) ユーベ ツエ カゼ フガテッサゲ ケサノ ハマ アレデル (ゆうべは強い風が吹いているから今朝の浜は荒れている)。

しかし、他動詞であっても、動作主体の状態をかえるもの、つまり再起的なものは、これになる。

- 15) カゼ ツエグデ オレ ポーシ カプラテネバ イランネ (風が強くて私は帽子をかぶっていないからいられない)。
- 16) コノ ヘンノ ヒトモ ハヤリノ フグ キラテル ヨー ナタ (このへんの人も流行の服を着ているようになった)。
- 17) サムガリノ アイズモ アズ シャツ ヌガテル ヨダノ (寒がりのあいつも厚いシャツを脱いでいるようだね)。

これらの点は、標準語とおなじである。

これらは、西日本の方言における「シオル」と「シトル」の用法にそれぞれ相当し、進行中の状態と結果の状態との対立をなすものである。

(二) 動作対象の結果の状態

これは、標準語の「してある」に相当するものである。

- 18) スイガ イドサ ヒヤサテル (すいかが井戸に冷やしてある)。

これは、だれかが井戸にすいかがを冷やした結果もたらされたものであり、対象の「スイカ」を主語にして、「はたらきかけた主体は背後にかくれ、問題にされない」(鈴木重幸 1972)

いい方である。この用法では、ふつう他動詞が使用される。つぎの例で「酒」は動作「オグ」の対象（置かれるもの）である。以下も同様である。

19) ツグエノ ウエサ サゲ オガテル (机の上に酒が置いてある)。

20) チンゲンサイ イツペ ウエラテル (チンゲン菜がたくさん植えてある)。

21) キレーダ ハナ トラテル (きれいな花がとってある)。

22) ゴハン ヨーイサテツサゲ、クテ イゲ (ご飯が用意してあるから、食べていけ)。

23) ホガノ ヒトサ イワネ ヨー ヨグ シャベラテル (ほかの人にいわないようによく話してある)。

24) コノ カイシャダバ キケンダ 作業ドゴ ヤツガ ヤラネガ 本人サ マガシエラテル (この会社は危険な作業をやるかやらないか本人に任せてある)。

以上が、酒田方言の結果相「サテル」の基本的な意味用法のもう一方のものである。この用法は、標準語の「してある」と同様、よくふつうに日常的に使用されている。むしろ、庄内方言全体で今でも頻繁に使用されている。この用法に関する「サテル」である限り、日常会話にもどんどんあられ、年代差をこえて、ごくありふれた使用用法であるといえる。この(二)サテルと標準語の「してある」とは、用法も使用頻度もかわらないといつてよい。

ところが、Iの一ですでに述べているように、当方言の結果相サテルは、以上のような用法だけではなく、さらに大きなひろがりを見せ、モーダルなニュアンスのちがいでひきうけている。

むしろ、このほうになると、基本的な用法の(一)とはちがって、酒田方言の粋をこえて、現在、庄内方言のかかなり広い地域まで使用されているといつてもよいかもしれない。

以下に、順次そうしたものを記述していくことにしよう。

二. 完了性の要素のつくもの

(一)動作がすでにすんだことをあらわす。

国語研 1985 は「完成相のテンス形式に準じる継続相」という部をもうけて、動作がすでにすんだことをあらわす「している」についてのべている。これに相当する用法が酒田方言の結果相にもある。

25) コドモガダ ワリ ゴド シタ。コゴドダバ オヤジ キノーノ ウジ シャベラテル (子どもたちが悪いことをした。小言は親父がきのうのうちに言っている／言っている)。

26) サギ ダレガ アルガテル ヨダ。サンサイ トラッデ ゼンゼン ネグ ナテルモノ (さきに誰かが歩いているようだ。山菜がとられて全然なくなっているもの)。

27) エサ ネグナラテル。キズガネ ウジ サガナ キタナダノ (餌がなくなっている。気がつかないうちに魚がきたのだね)。

これらは、すでにすんだ動作を表現していて、「シャベタ」「アルイダ ヨダ」「ネグナタ」などの完成相の過去形とかえても意味はかわらない。これからのべる(二)と(三)もその点ではかわりがない。いずれも、いわゆる完了性に直結するものだからである。

(22) 酒田方言における進行相と結果相の対立

(二) 経験をあらわす。

国語研 1985 にこのことがくわしくのべられているが、経験をあらわす用法もこのグループにはいるだろう。

- 28) エンソグデ コラテツハゲ マダ ヨラネグデ イ (遠足で来ているからまた寄らなくていい)。
29) コノ トツテデ チツチェ ドギ ショビツリ サテル (この突堤で小さいときシビ釣りをしている)。
30) ガクセージダイニダバ タニガワダゲサ ヨグ ノボラテル (学生時代には谷川岳によく登っている)。

(三) 準備された状態にあることをあらわす。

高橋 1969 (「すがたともくろみ」) に、標準語の「してある」という形に、準備された状態をあらわす用法があることがのべられている。酒田方言の結果相にも、これにあたる用法がある。

- 31) ライシューマデ デギル ヨー ダイグサンサ ヨグ タノマテル (来週までできるように大工さんによく頼んである)。
32) モー アナ ホラテル。アド タネ マゲバ イデンダ(もう穴を掘ってある。あとは種をまけばいいわけだ)。
33) クスリ ヨヤグサテルハゲ、トテ キテ クレ(薬を予約してあるからとってきてくれ)。
34) イズ サブグ ナテモ イイ ヨー モー セギユ カワテル (いつ寒くなってもいいように、もう石油を買ってある)。

三. 習慣性の要素のつくもの

標準語のアспект研究において、これまで「している」のあらわすくりかえしの用法は、結果の状態ではなく、進行の状態の系列としてとらえられてきた。ところが、当方言では、くりかえしないし習慣は進行相ではなく、結果相になる傾向がある。この点は、これまで標準語についていわれてきたこととことなるが、それが、この方言の特徴なのか、それとも、いままで標準語についていわれてきたことに問題があったのか、そうしたことはよくわからないが、このことはとくに注目にあたいることであろう。

(一) くりかえし

動作がくりかえしおこなわれることをあらわす。

- 35) オレ マイニジ ビョーインサ イガテル (私は毎日病院に行っている)。
36) カレダバ マイニジ ロクジニ オギラテル (彼は毎日六時に起きている)。
37) アノ ジーチャ ニジヨービニ オミヤノ メデ マンジュードゴ ウラテル (あのじいちゃんは日曜日にお宮のまえでまんじゅうを売っている)。

おなじようなことがらでも、属性としてとらえるばあいには進行相「シテル」になり、くりかえしとしてとらえるばあいには結果相「サテル」になる傾向がある。

- 38) 彼ダバ 中学校デ 英語ドゴ オシエデル (彼は中学校で英語を教えている)。

39) 彼ダバ 中学校デ 毎週 5回 英語ドゴ オシエラテル (彼は中学校で毎週5回英語を教えている)。

例35~37からも状況語「毎日」「日曜日」をとりさると、属性としてとらえることになり、進行相「シテル」となるのがふつうである。

(二) 慣習

くりかえしのうち、それが社会的習慣になったものを、ここでは慣習と呼ぶ。慣習をあらわすようになると、「シテル」より「サテル」になる傾向がいつそう強くなる。

40) チョド イマゴロ ヤマデ ワラビ トラテル モンダ (ちょうど今ごろ山でわらびをとっているものだ)。

41) ムガシダバ コノ シェズ ドゴノ エデモ ナワシロデュ モノ ツグラテダ (昔はこの節にどこの家でも苗代というものを作っていた)。

42) メダバ カゾエ ヤツツニ ナッド ガッコサ アグラテダ モノダ (まえば教え八つになると学校にあげていたものだ)。

43) コンダ シ ムラデダバ クサ ムシラテル (こんな日、村では草をむしっている)。

44) サガダデダバ ヤシギノ ウジノ キ ボーガサ ウント ヤグダタテル (酒田では屋敷のうちの木が防火にたいへん役立っている)。

例40「サテル」(トラテル)を「シテル」(トテル)にかえるならば、<今ごろは取っている>というアクチュアルな意味にかわるのがふつうである。

これらの例について、「シテル」にはできないかということをお老人たちにたずねたが、どうしても「サテル」でなければならないというつよい返事がかえてきた。

四. 予定の要素のつくもの

(一) 予定・予測された状態

予定・予測というばあいは結果相になることがおおい。

はじめの3例は、変化動詞なので予定でなくても「サテル」の形になるのがふつうであるが、そのあとの例をみればわかるように、動作動詞でも結果相になる。

45) アシタ ジェンゴグノ ショーニンガダ シェンメ ミジサ ロテンドゴ ヒラガテル ヨース ミラエル (あした全国の商人方が、狭い道に露店を開いている様子がみられる)。

46) アド 2、3ニジモ タデバ ハナモ ツケラテル ヨー ナテダ (あと2、3日もたてば花もつけているようになっていた)。

47) アシタダバ キャグ クツサゲ ズット オレノ ヘヤサ ハイラテル (明日は客が来るからずっと私の部屋に入っている)。

48) カレダバ アシタノ ゴゴ ハダゲデ ハダラガテツサゲ ソサ イゲバ アエル (彼はあしたの午後畑で働いているからそこにいけば会える)。

49) コンドノ ナズヤスミ ナレバ ワツゲ 人ガダ イッペ ヤテキテ ポートナンカ アヤツラテル (こんどの夏休みになれば若い人たちがたくさんやってきてポートなどをあや

(24) 酒田方言における進行相と結果相の対立

つっている)。

これも前項と同様、老人のインフォーマントに両方しめすと、やはり「サテル」のほうがよいという返事であった。

以上の三と四は、用法としては安定しているが、基本的な用法とのつながりがよくわからない。

五. 感情評価的な要素のつくもの

アスペクチュアルな意味を中心としたサテル形式のなかではモーダルな方向へとながれているが、つぎにのべる(一)～(三)は持続性がのこっている点で、基本的な用法から逸脱していない。

〈1〉持続性のみとめられるもの。

(一)状態の持続の完遂をあらわす

シテル形式でもいうことができるが、これをサテル形式にすると、状態を究極まで持続する意味が明示される。

50) ジーチャダバ 95 スギデモ ビョーギ ヒトズ サネデ イギラテルデバ (おじいちゃんは95過ぎてても病気一つしないで生きているよ)。

51) ソンダゲ ナンゲグ デンワ カゲラテレバ ウシロノ シト コマンゼ (そんなに長く電話をかけていれぼうしろの人が困るよ)。

52) メズラシグモ ネノニ イナガノ シトダバ イズマデモ ミラテル (珍しくもないのに田舎の人はいつまでも見ている)。

Iの「一.はじめに」のおわりちかくで、〈さいごまでがんばっている〉のニュアンスをもつ例としてだした「パススッカリトマルマデ…コシカゲラテレバ…」も、ここの典型的な用例である。

(二)感情発生の状態

なんらかの原因によって、つよい感情がひきおこされ、それが持続していることをあらわす。原因がしめされていても、「(テレビがついていたので)コドモガダ ミデル」のような、感情をしめさない人間行動は、サテル形式(ミラテル)にならない。また、ぎゃくに、単に強調、感情にともなううごきをのべただけで、原因がしめされていないばあいにはつかえない。

× アダマガラ ユゲ ダデデ ゴゲル (あたまからゆげたてておこる)。

× オドリカガテ ヨロゴブ (おどりあがってよろこぶ)。

つまり、原因とつよい感情がどちらもあらわされている必要がある。

53) ムスメ シケンサ ウガテ ヨロゴバテル (娘が試験に受かって喜んでいる)。

54) キューニ ジシン キテ アネチャ タマガラテル (急に地震がきておねえちゃんがおどろいている)。

55) コドモ ビョーギ ナテ ハハオヤ シンパイサテル (子どもが病気になって母親が心配している)。

Iの一の〈つよい感情をあらわしている〉の例であげた「ムスゴ女サ…ゴゲラテル」の例もここにはいる。

(三)めいわくの状態

あるできごと＝状態によって、はなしての利害のたちばからみるとめいわくさがひきおこされることをあらわす。

- 56) ユーベ キャグ ヨナガ キテ シマテ アサマデ オギラテダ (ゆうべ客が夜中にきてしまつて朝まで起きていた)。
 57) ガメンサ ナナメセン カガラテデ テレビ トートー ミエネガツタ (画面に斜線がかかっている、テレビがとうとう見えなかった)。
 58) アメ フラテデ コマタ ゴド サンポ デギネ (雨が降っていて困ったことに散歩ができない)。

主文にもできるが、従属文で原因的につかわれることがおおい。

〈2〉持続性がなくてもいいもの

サテル形本来の持続性が不要になる点で、五.のなかでもさいごにくるが、感情＝評価の面が前面にでてくる。

(四)意外なできごとの発生・成立

期待以外のできごとの成立をあらわす。この形式に相当する標準語の形式は、「してしまった」であろう。ここにあげた諸例は「わらってしまった」のように訳すことができる。

- 59) シェンシェノ スガダ ミデ オモワズ ワラワテダ (先生の姿を見て思わず笑ってしまった)。
 60) マサガ オヤガダ ジギョーサ シツペサテルドダバ オモワネケ (まさか親方が事業に失敗してしまったとは思わなかったよ)。
 61) オヤジ ジブンノ ムスゴドゴ ヒガテダ ジゴ アタ (父親が自分の息子をひいてしまった事故があった)。
 シテル形式でいうとその意味は顕在化しない。

六. 使役形式とモノ可能形式の結果相について

(一)使役形式(サシエラテル)のばあい

標準語の使役形の継続相「させている」には、本来の使役が実現している状態をあらわすばあいと、放任の状態をあらわすばあいがあるが、当方言の使役形式の結果相のばあいも、これに相当する用法をもっている。

(1)本来の使役の実現している状態をあらわすばあい

- 62) シェガレドゴダバ コゴノ ノーギョコーコサ ハイラシエラテル (せがれはこの農業高校に入らせている)。
 63) トシゴロノ ムスメドゴ イマ ハダガ サシエラテル (年頃の娘を今裸にさせている)。
 64) オラエダダバ ムスゴサ タンボ ミマワラシエラテル (うちでは息子にたんぼを見回

(26) 酒田方言における進行相と結果相の対立

らせている)。

(2)放任の状態をあらわすばあい

65)イズデモ ムスゴドゴ スギダ ヤマサ ノボラシエラテル (いつでも息子を好きな山に登らせている)。

66)ムスメドゴ スギダ オドゴン ドサ ヨメ イガシエラテル (娘を好きな男のところに嫁に行かせている)。

(二)モノ可能形式の結果相(サラテル)について

モノ可能形式というのは、つぎのような形式をいう。「このペンはよくかける」のように、モノが可能性=能力の意味をもっていることをあらわす形式(カグに対してカガル、アグに対してアガル)をモノ可能形式とよんでおく。

標準語の「かける」は人の能力をもあらわすのだが、当方言のモノ可能形式(カガル)はモノがその能力をもつことだけをあらわす。

標準語 ○このペンはよくかける。

○この子はもう字がかける。

方言 ○コノ ペン ヨグ カガル。

×コノ コダバ モー ジ カガル (○カガレル/カガエル)。

当方言のモノ可能形式「サル」(カグ-カガル、ホドグ-ホドガル)が結果相「サラテル」(カガラテル、ホドガラテル)の形式になると、つぎのようないくつかの意味をもつことになる。

(1)モノにその能力があることをあらわす。

モノがその動作、変化をする能力をもっていることをあらわす。

67)コノ マンネンヒズダバ イマデモ カガラテル(カガル) (この万年筆はいまでも書けている-書ける)。

68)コノ ズボン フタ イマデモ ハガラテル(ハガル) (このズボンは太った今でもはけている-はける)。

69)コノ トダバ 十ネン タテモ カンタンニ アガラテル(アガル) (この戸は十年たっても簡単にあいている-あく)。

この意味は、モノ可能形式の非過去形のばあいとあなじである。これは、たぶん、能力という性質をあらわすことによってアスペクトから解放されるためであろう。

この用法は、目の前で実現していないときにつかう(ポテンシャルな用法)のがふつうであるが、目の前でその能力が実現しているばあい(アクチュアルな用法)でもつかえる。

70)コノ ヒモ マダ シダリテバリデ コンナ ジョツサナグ ムスバラテル (ムスバル) (このひもはまた左手ばかりで簡単に結べている-結べる)。

(2)可能性が実現した結果の状態をあらわす。

可能でないとおもわれていたようなことがらが実現したばあい、その動作の実現(完了性)に注目して、その結果の状態にあることをあらわす。

71)コンダ ドゴサ ダンチ タダラテル (こんなところに団地がたっている)。

72)コノ ワッペンダバ ツルツルシタ ドサモ ツガラテル (このワッペンはつるつるし

たところにもついている)。

73) テジナデ フシギニモ タマゴ タダラテル (手品で不思議にも卵が立っている)。意外性などのニュアンスがつくことがあるわけである。

おなじ事実をただのサテル形でもいえるが、ただのサテル形でいうと、単に結果の状態が実現していることしかあらわさないのに対して、この形式にすると、不可能かとおもわれたことが実現した結果の状態にあるという実現性のニュアンスがつよづく。

たとえば、例 71 を

・コゴサ ダンチ タダテル (ここに団地がたっている)。

のようにかえると、意外性のニュアンスはまったくなくなる。例 73 も同様である。

・タマゴ タダテル (卵が立っている)。

なお、この形はいつでも結果相であらわれる。また、標準語で「やっとできた」というのに相当するような過去形「サラテダ」の形はない。「団地 ヤット タタ」のように、完成相の過去形をつかう。

(3) 自然に(ひとりで)に)変化が実現した結果の状態にあることをあらわす。

変化がひとりでに実現し、その主体または対象が変化の結果の状態にあることをあらわす。

74) ウミベノ スナサ カジェ ジドゴ カガラテル (海辺の砂に風が字を書いている)。

75) ネムテダバ シラネ ウジ リョーテ ムルバラテダ (眠っていたら知らないうちに両手が結んでいる)。

これらは、いずれも意志的にして変化した状態なのではなく、人間の無意志の動作や自然現象の結果の状態なのである。

変化の結果の状態にあることが、属性的であるばあいにもつかえる。

76) キ ツダバ セーター スコシ ホドガラテル (気がついたらセーターがすこしほどけている)。—アクチュアル

77) コノ セーターダバ フルシハゲ トギドギ ホドガラテル (このセーターはすこしふるいのでときどきほどけている)。—ポテンシャル

78) テニス ヤテダバ シゼント クズ ヌガラテダ (テニスをやっていたらひとりでに靴が脱げていた)。—アクチュアル

79) ユル クズダハゲ ワスツデ ハシンナサ ネットチースツド スグ ヌガラテルナダ (ゆるい靴なので、忘れて走るのに熱中するとすぐ脱げているのだ)。—ポテンシャル
ポテンシャルというのは、一回かぎりの目のまえの状態ではなく、いつものこと、つまり属性的なばあいである。

モノ可能形式を結果相「サラテル」にしないで、非過去形のまま「サル」の形にすると、この意味をあらわせない。

80) カタ ケード ホドガル (買った毛糸がほどける)。

81) コノ ゲダ ショーシ ヌギガダ シテモ デツ ドギダバ チャント ソロワル (このゲタは、はずかしい脱ぎ方をしても、出るときはちゃんとそろろう)。

(28) 酒田方言における進行相と結果相の対立

例 80 は「ホドガル」のばあい、乱暴にあつかうとそうなるのかもしれない。また、例 81「ソロワル」のは、話し手がだれかの動作の結果であることをしているのかもしれない。いろいろなばあいがあるだろうが、すくなくとも自然に実現したのではない。このように、意志的でない変化の結果の状態のばあい、いつも結果相であられるのである。

以上のように、(2)と(3)はモノ可能形式が結果相になってはじめて実現する(そのようなニュアンスがあらわれる)という点は、特筆にあたいるだろう。

文 献

荒井孝一 1983「酒田方言の動詞のテンス」(『国文学解釈と鑑賞』4月号)

奥田靖雄 1977「アスペクトの研究をめぐって——金田一的段階——」(『国語国文』宮教大)

〃 1978「アスペクトの研究をめぐって」(『教育国語』53.54.むぎ書房)

金田章宏 1983「東北方言の動詞のテンス」(『琉球方言と周辺のことば』千葉大学教養部)

国立国語研究所 1985『現代日本語の動詞のアスペクトとテンス』

佐藤里美 1986「使役構造の文」(『ことばの科学』言語学研究会編 むぎ書房)

鈴木重幸 1972『日本語文法形態論』(むぎ書房)

高橋太郎 1969「すがたともくろみ」(『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編 むぎ書房)

——山形県方言研究会——

(平成元年8月16日 受理)